
意地悪な君/沖神

いとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

意地悪な君／沖神

【Nコード】

N8120I

【作者名】

ひとり

【あらすじ】

前言撤回。やっぱり彼は意地悪でした…。

(前書き)

- - - ご注意 - - -

この小説は短編小説
の『相愛傘』の続編
となっています。

読む際は、初めに短
編を読んで頂いた後
にアクセスして頂く
事をお勧めします。

- - - - -

「神楽ちゃん、具合悪いの？」

寝室から出て来た私に、新八が心配そうに聞いた。

「ちッ…違うヨ！全然元気アル！！」

「でも、隈出来て…」

「…ッ大丈夫だって言ってるオオ！！いいから早くご飯出せ
！」

昨夜はあまり眠れなかった。

だって……

『また明日。』

そう言った彼の微笑んだ顔を思い出し、また赤面する。

——どんな意味があるのかな。

昨日、雨の中、彼に突然唇を重ねられた。

凄く温かくて、柔らかくて、唇には感触がまだはつきりと残って

る。

本当に突然の事で、今でも彼が何故、そのような事をしたのか理解出来ずにいた。

『もしかして……』と期待する気持ち、逆に『いつもの悪戯だろう』と思う気持ちがある。

その2つの気持ちのどちらだろうか、と考え始め、眠れなかった……という訳である。

「……眠いアル。」

ご飯を食べ終え、いつもの服に着替えながら、そう呟いた。

——…寝たいなあ、でも……

「銀ちゃん、新八、散歩行つて来るアル！」

今日、恥ずかしいけれど、彼にあの事の意味を聞こうと決めていた。

傘を持ち直し、昨日の雨が嘘のように青く澄んでいる空を仰いだ。

*
*
*

―…あれ？可笑しいアルな…。

いつも路地で出会はずの彼がない。

辺りをキョロキョロと見ても、黒い隊服の青年は居らず、子供達が楽しそうに遊んでいる姿しか見つけれなかった。

―…『また明日。』って言ったくせに…。

もしかしたら河原にいるかも、と思い、少し急ぎ足で向かった。

河原を暫く歩いていると、目の前に黒い隊服の男を見つけた。

―…あ…！

いた、と思ったが、直ぐに別人だと気付いた。

河原にいたのは、亜麻色の髪ではなく、黒髪の男だった。

「トッシー、こんな所で何してるアルか？」

男は彼の上司の土方だった。

「…あ？チャイナ娘か。何って、見回りしてんだよ。」

「ふーん…。」

「…あいつは、何処？」

仲が良くないと言いつつも、常に一緒にいる彼の姿はやっぱりなかった。

「おッ…おい。」

「あ？」

煙草を吸いながら歩く土方を追い掛けながら、ぎこちなく話し掛けた。

「…自然に、自然に…。」

「きよ、今日は珍しく、サドがないアルな。」

言い終わると、安堵した。

「ああ、総悟なら風邪で寝込んでるぞ。」

「え……？」

「昨日、雨に当たったらしくてな。熱出たから、俺が代わりに見回りしてんだよ。」

そう言う土方の右手には、薬局の袋があった。

——…熱出てたなんて…。

昨日の事を思い出す。

私が濡れないようにと、私に傘を傾けてくれていた彼はずぶ濡れだった。

「……………。トッシー…………。」

不思議そうに私を見る土方。

「私…………お見舞い行くアル。」

そう言うと、土方は驚いた顔をした。

「はあ？　どういう風の吹き回しだ？　…　ああ、寝込んでいる今がチヤンスってやつか？」

「ちげえーよ、ボケ！　…　ただ、ちよつと…。」

「……………ふう。」

口籠もる私を見て、土方が溜め息をついた。

「……………仕方ねえ。コレ持って先に行つてろ。」

「え…、トッシーは？」

「俺はまだ見回り終えてねえから、終わってから行く。……いいか、殺すなよ？」

「おう!!」

そう返事をして、土方と別れ屯所と向かった。

*
*
*

隊員に案内してもらい、彼の部屋へと入った。

彼は布団に寝ていた。

「……サド。」

声をかける。

けれど返事は返って来ずに、すー、という寝息だけが聞こえた。

……どうやら、熟睡しているようだ。

——……もう、熱上がりきったのかな。

彼の表情は苦しそうではなく、ただ頬だけが淡く染まっていた。

「……。」

そつと手を伸ばし、彼の頬に触れた。

心臓の音が五月蠅い。

息も上手く出来なかった。

―…な、何してるアル、私!!

そう思って、手を放そうとした時だった。

「……チャイナ……？」

びっくりして、彼の方を見ると、閉ざされていた蘇芳色の目がこちらを見ていた。

「……ッ！……ちっ……ちが！これは別につ……」

慌てふためいて、頬から放そうとする私の手に、彼の手が絡む。

「……」

「お前の手え、冷てえな……。」

そう言って、彼はまた自分の頬に私の手をくっつけた。

「……ッ。」

恥ずかしくて恥ずかしくて仕方なかった。

今まで、喧嘩以外でこんなに長く彼に触れた事はなかった。

手に彼の唇が微かに触れる。

「……あッ。」

不意に小さく声が出て、急いで別の方の手で口を塞いだ。

―…恥ずかしい。

昨日の事までも思い出してしまう。

「サ…サド…！薬ッ！薬飲むアル…！」

「……やだ。」

「『やだ』じゃねえ…！早く飲め…！」

彼は渋々と起き上がり、土方が買って来た薬を飲んだ。

やっと彼の手が離れ、安堵する。

段々意識がはつきりして来たのだろう、虚ろだった彼の目は普段と変わらなくなっていた。

「……んで、チャイナは何で此处に居るんですかい？」

急な質問に戸惑った。

「え……！？え……と、トッシーに会って、お前が寝込んでるって聞いて……」

「わざわざ来たんですかイ？」

「しっ…仕方ねえだろ！？何か、私も責任ありそうだし…！つか、昨日、お前が『また明日。』とか言う…！」

途中まで言って、手で口を塞いだ。

「…これじゃ、昨日の事思い出してしまうアル。

彼をチラッと見ると、蘇芳色の瞳と目が合い、すぐに逸らした。

「…でも、聞くって決めたんだ。

俯きながら、今まで心の靄となっていた事を、勇気を出して口に
した。

「サド…、き…昨日の事なんだけど…」

「…チャイナ。」

言い終わる前に、彼が声を出した。

彼の手が私の顎を掴んで、上を向かせた。

目の前にはいつもと同じように、悪戯っぽく笑う彼。

「…ま、まだ話途中アル！」

「知ってまさア。」

そう言うと、また彼の唇が私のに重なった。

「……ッ。」

昨日より熱を帯びている、彼の唇。

角度を変えて、何度も口付けられた。

その度に息と声が漏れてしまう。

最初の軽い口付けから、段々と深くなる。

「…ふう。」

息が上手く出来ず、苦しい。

力も入らない。

やっと離れた彼はまた微笑して、私を抱き寄せた。

「風邪、うつっちまうなア。」

と、クスクスと笑っていた。

私は彼の腕の中で、息を整える事で必死だった。

*
*
*

翌日、私は見事に風邪を引いて寝込んだ。

「だから言ったのに、具合悪いんじゃないかって。」

呆れながら、私の世話をする新八。

「うー、でもあの時は本当に何もなかったアル。」

「はいはい。」

「テメー！信じろヨ！！」

新八のメガネを掴んで、投げ捨てた。

「あーッ！！メガネー！！」

「……ッたく、神楽。お前寝込んだって、凶暴なのは健全だな、才
イ。」

目の前の銀髪の男が、新八のメガネを拾い上げる。

「銀ちゃん。だって、ダメガネがあ…。」

「ダメガネ言っなあ！！」

メガネを受け取り、叫ぶ新八。

その時、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「朝っぱらから、何してんでイ。」

『えっ！？』

3人とも同時に声を出し、後ろを振り返ると、黒い隊服の青年が1人立っていた。

「すいやせん、チャイム鳴らしても旦那たち気付かないから、勝手に邪魔してますぜイ。」

啞然とする3人。

少し間をおいて、やっと銀時が声を出した。

「いや、まあ…驚いたけど、どうしたの？もしかして依頼？」

「…いや、チャイナの見舞いに来やした。」

「!」

名前を出されてギョツとする。

「え…? 何で沖田さん、神楽ちゃんが具合悪いって知っているんですか?」

不思議がる新八。

「…もしかして、

「ああ、昨日、俺がチャイナにうつした…」

「ぎゃああああー!!」

叫び声を上げて、沖田の声を掻き消そうとしたが、無意味だった。

—…やっぱり!!こいつワザと!

彼をキツと睨むと、彼は楽しそうに笑っていた。

「え…?どういつ事?」

意味が分からず、聞き返す銀時。

「実は昨日、チャイナとキ……」

布団から飛び出して、沖田の口を慌てて手で塞ぐ。

「キ？」

「き、…競争したアル！銀ちゃん！」

「何の？」

「ひゃ…、百メートル走アル！！」

「何で百メートル走…？」

「うつせええ！メガネ！お前は口挟むな！！」

「何でだよッ！？」

必死に話を逸らそうとしていると、沖田がクスクスと笑って言った。

「神楽は素直じゃないですねィ。」

「…え、今…、」

驚いている間に、沖田の手が私の顎を掴み、そして…

ちゅ

『……………!』

硬直する3人。

「じゃ、俺は仕事あるんで帰りますア。」

ボタン

彼は何事もなかったように去って行った。

その日は、万事屋も真選組も騒ぎまくりだったという事は言つまでもない。

意地悪な君

（後書き）

続編終了です、*）ノ

読んで頂き有難うございました！

今回の裏話は…↑

長いので、活動報告の方に書きました。

気になる方はどうぞーD、*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8120i/>

意地悪な君/沖神

2010年10月15日16時51分発行